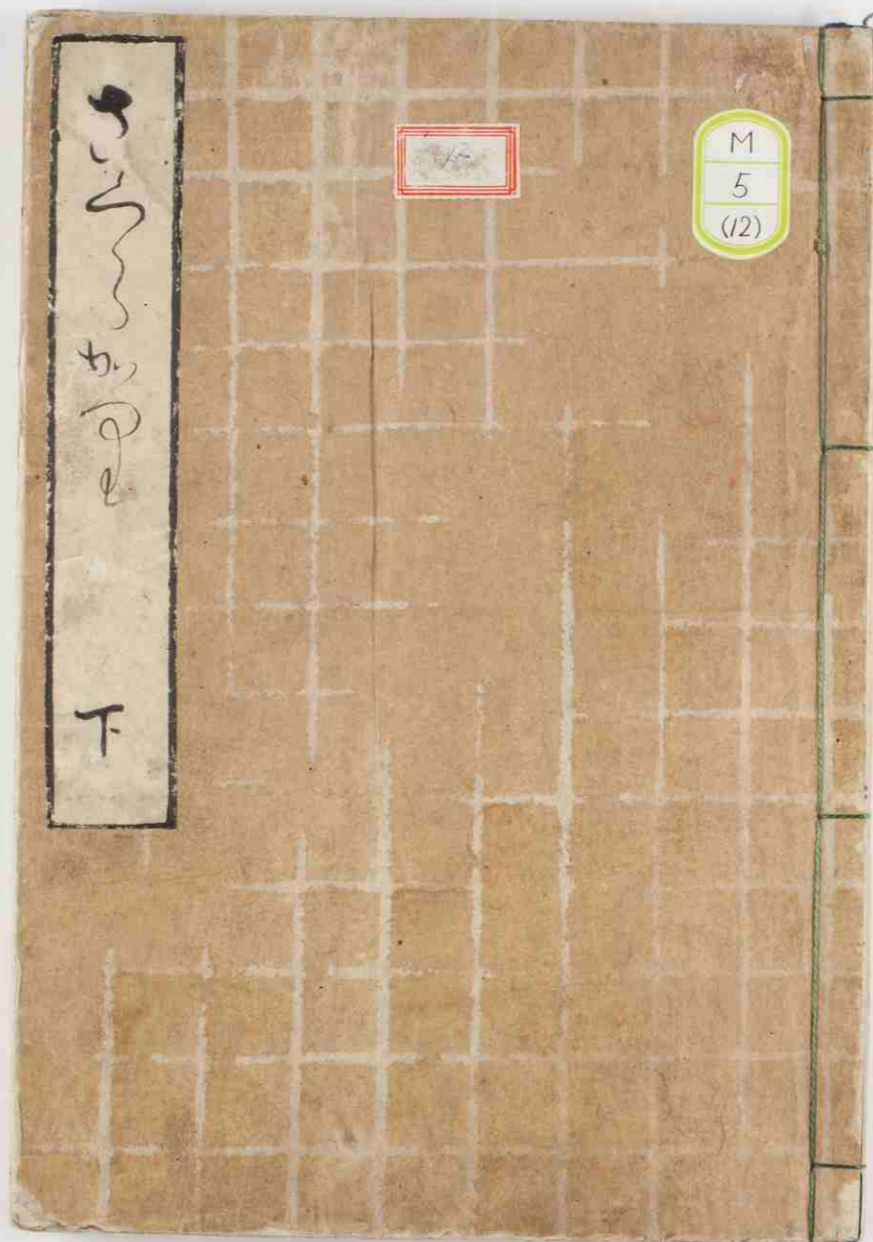


破損あり

以下 汚れあり



下
F
あ
ま
り
の
し
ら
べ

あま

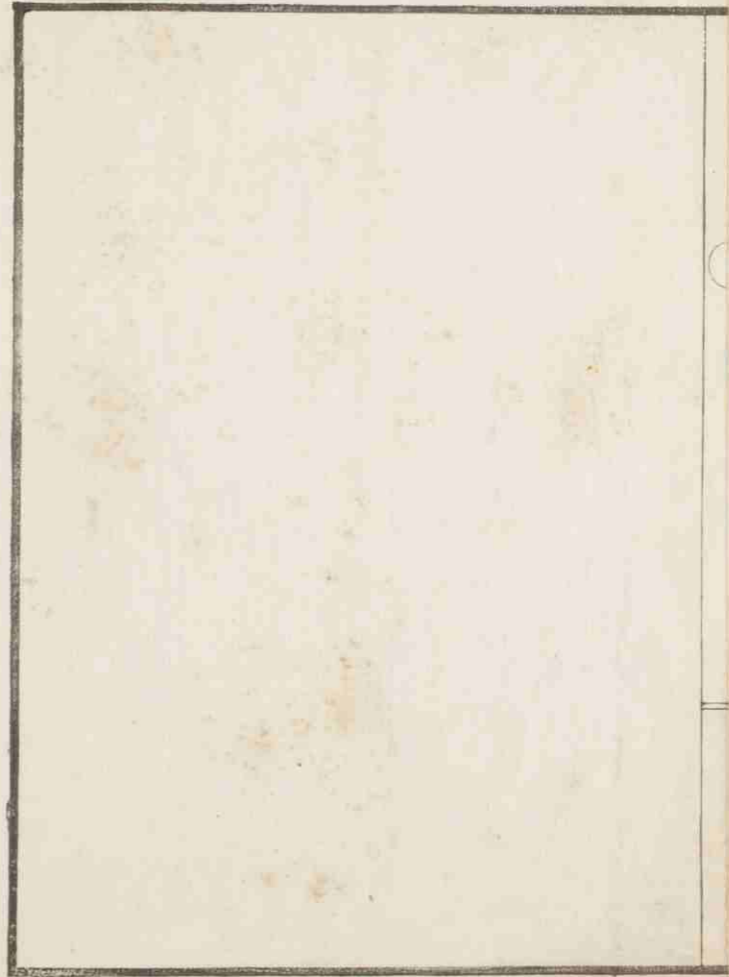
M
5
(12)

秋田郡 寧海（今も伊達野にあり）
 ありと遠海に流るる川
 櫻野（今も伊達野にあり）
 其の春にわかれ命
 むし 天長七年の大地震小
 四天王寺六佛像四王寺等
 破道埋れ今も神田村の邊に
 松谷地の名はこを傳ふる
 元禄十九年壬午の夏と始ま
 今言ふ保十二年丁未の夏田にありぬ
 其の昔に 柱石を 莊園 濁川水
 新道田より手形の村にあり
 此水田の土地 狐森 五堰 四堰
 三堰 二堰 一堰 地ありしり川の初
 佛名田 大佛田 政所



櫻賀理下卷 母久呂玖

母法山緑櫻	三哲山	琵琶沼櫻	乱橋	捨神	雨零櫻	大堤	八重一重櫻	雪舟の山櫻	花園	玄嶋櫻
九丁ウ	九丁オ	八丁ウ	七丁ウ	六丁ウ	五丁オ	四丁ウ	二丁オ	二丁ウ	二丁オ	二丁オ
笛竹	笛吹櫻	龍神	吹上櫻	山吹	弓形	由伎の宮櫻	小和清水櫻	櫻田	駒形	檢断
十五丁オ	十四丁ウ	十三丁ウ	十三丁ウ	九丁ウ	十三丁ウ	十二丁ウ	十一丁ウ	十一丁ウ	十一丁オ	十丁ウ



笛瀧さくら 十五丁オ
 日揚寺の櫻 十五丁オ
 連理地さくら 十三丁ウ
 海老前の櫻 十七丁オ
 千束のさくら 十七丁オ
 小田原さくら 十七丁ウ
 ちり庵の櫻 十六丁オ
 うきさくら 十六丁ウ
 小杉さくら 十六丁ウ
 うきさくら 十九丁ウ
 廿九日さくら 二十丁オ

三笠の山さくら 廿二丁ウ
 おくささくら 廿二丁ウ
 燈臺さくら 廿二丁オ
 ころくの河櫻 廿二丁ウ
 輪田寺さくら 廿三丁オ
 たのめ地園櫻 廿四丁オ
 けい道さくら 廿四丁オ
 長閑の一重櫻 廿四丁ウ
 奈良の八重櫻 廿五丁オ
 いづさくら 廿六丁ウ

佐久良賀理 下巻

松嶋櫻

菅江真澄誌

吉原の瑞巖寺の山簾き波あれ濱の近き小五条
 庵とよまのり地寺小瑪瑞して作るたる十六尊阿羅
 漢其軀五丁寺まやまろく人のめとあわさるいあやう
 なくそんえさる安置する地あり小老まのいとむら
 く鳴るうむとこ松園とて松園櫻が置るさるも
 送さるりあさくらあまといさくらもあたり此東
 前工月のねえ雪の吉嶋とい日記おしき花の松嶋
 と日記を去る地松島松の事其日記を記せり

花園櫻

おのれ信濃國に在りてはこゝに誦方れ七年五膳の由費祭事あり

ゐれ今丹波平宮の針ぬ推原景富大人はと小鴨湖と
 小舟流り流れ花いろ霞つゞき不二とて小舟おちてとく
 おとあけ道はよしの海乃の底もよきの色をさわ
 みのとて名花のよき雪きよにのきてありぬありぬ
 よ盛りぬれをありこの名を何とてふわつとてまの浦合
 花置といふとまをりしと名をさつてとてさるる困
 のへ日流るとも花もよきのよる路此事諏訪の湖といふ一
 巻の日記小舟流り小鴨湖

雪船の山櫻

綴子驛の後手流りそとく此つゞき飛明紀日内入籠
 かしあれまはしこの事わづと七倉宮の塚おちと見えたりと此
 處の枝郷小知子内とて治曆延久のつゞき蛭夷人極家とて

近き世をもも家の四五もありはしといふ今も住まひり
 今を自田字小知子内とて知許奈伊を蝦夷語のぬれ
 本紀小あは柵美をさるるつゞき奈伊を那伊を澤の事と
 といふもをキコナナとて千コナナとて今も雪重
 同名ありて其山崎とて千コナナとて西碗とて東碗とて
 山路あり世綴子やと蝦夷の住とて舊跡とて北館南
 館内館外館など此名ありとて文殊山の雪舟舟形まれば
 消さてとてかりて箱田佃とて石二布雪舟田方舟田の
 わづ其雪船山の林原のうら小橋とて近きよるあはれ
 牡丹橋もあはれ世山名をかりて雪船の山櫻とて

八重下重櫻

此櫻を秋田久保田城内坊の龜町といふ所の姫庫の近きよる

むらうよりあて當りおのせとこれ見てもんこれや、中へ米を
 下へふんを白ひく廿五五のしえきせよとのひくあひ紙り
 ちへ白を補つ初きへ給ふをりも雁書は急をむきせうじて
 大急ぎうへ人あまを群れ来ててもあつひ、こ 御前へおんまて
 近うつうまをだちふのこれ、公孫をうちたてあま、魂をま
 ちへせあしをそくふ、あまをうびやと捨くおけい、あまをうび
 せとむらも、あまをそくふ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 米はゆきあつて庫あつて、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 ちへまよとあまのまうに、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 やまあひの、あまを折敷へ一盤つ盛り、君のあまをうび、
 ぬれ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、

今居よりてこまひ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 よのしを、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 とまを、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 とも、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 君われ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 つゆ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 ほん、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 まう、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 中、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 給ひ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 せ、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 され、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、
 あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、あまをうび、

まはら

四

今もわしの名を後にも 世君を樹藝と好む給ひく
 ささくも種も自ひも末も残りて此河沿流の
 大神宮の三本の大槻すこ内鯉川村の 多惣右門の庭の梅心
 まさうはごの八重一重梅も自ひも残りて
 其の梅も今も枯らぬ事

大坂のさくら

由理郡本庄の淡路より南一里ほろりして大塚とて岩原
 基といふありす中塘の山崎山に華師佛あり世山崎よ
 りてさくらもほろりありす久保田の宝身鏡院後なるあり
 せしはさくらあり此名とももさくら大塚さくらさくら
 四月のさくらさくら大塚のさくらとて尺五とてさくらさくら
 さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

雨 天 櫻

此後秋田郡南比内十三所の郷谷地所とて士坊の河井正記とて
 むの家は里に座常坂あり其後桜なるあり座頭桜と
 そいふ此も甚もさくらを唐及長末あり花都とて桜あり
 音人の琵琶も明も来ておもしろけい十日斗も此郷に
 止りてさくらさくら人々集り法師が好まき何あつて法師も
 さくらとて花都さくら吾が好まき餅を喰ふ飽かぬとて
 ある事ありし人々さくらさくら事さくらさくら餅を喰ふ
 さくらとて種も二斗の餅喰ふさくら餅足りさくらさくらとて
 さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら
 さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら
 さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら
 さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくら

日

建^ス冬^ニ其^ノ極^ヲを^シ寤^ル見^ル替^ハの^ル末^ノ明^ノ知^ハは^シめ^テ古^クは
あり^ク枯^リ花^都ろ^キ垂^ル糸^ヲ十^二月^ノ末^ニあ^リこ^ト

捨神櫻

地^ノ極^ニ同^ノ郡^ノ別^ノ所^ノ村^ノ地^ノ極^ニ在^リ別^ノ所^ニ同^ノ名^ノ三^ノ河^ノ園^ノと^シあり^テ
万^ノ歳^ノ出^ル在^ル處^ニ書^ク家^ノ子^ノ別^ノ所^ノ流^ルあり^テ秋^ノ田^ノの^ノ別^ノ所^ニ
み^レの^ク九^ノ戸^ノの^ノ人^ノを^シ中^ニ小^ノ畠^ノ山^ノ五^ノ郎^ノ兵^ノ衛^トと^シあり^テそ^ノを^シ畠^ト
重^ノ忠^トの^ノ男^ト未^ノだ^ニあり^テ正月^ノ式^ニと^シ多^クし^テ若^ク水^ニむ^クと^シあ^リ希^ニ
の^ノ大^ノ紋^ニ小^ノ木^ノ太^ノ刀^トと^シて^シま^シり^テ本^ノを^シ三^ノ家^ノあり^テと^シり^テ
し^テ畠^ノ山^ノ治^ノ右^ノ王^ノ門^ノが^ノ祖^ノ與^ニ五^ノ右^ノ王^ノ門^トと^シ地^ノ与^ニ五^ノ右^ノ王^ノ門^トと^シ本^ノ家^ト
を^シ今^ノと^シ治^ノ右^ノ王^ノ門^トを^シ本^ノ家^トと^シて^シ今^ノ一^ノ家^ノを^シ絶^スり^テ地^ノ村^ノ堂^ノ原^ト
大^ノ日^ノ如^ノ来^ノ行^ノ基^ノ僧^ノ正^ノ作^トと^シ本^ノ木^ノ地^ノ大^ノ日^ノ如^ノ来^ノ南^ノ部^ノ鹿^ノ角^ノ郡^ノ小^ノ豆^ノ
蘆^ノ遮^ノ那^ノ佛^ノ中^ノの^ノ木^ノと^シ末^ノ木^ノ干^ノ狐^ノ大^ノ日^ノ解^トと^シひ^テ南^ノ部^ノの^ノ小^ノ豆^ノ澤^ノの^ノ大^ノ日

如^ノ来^ノ堂^ノの^ノ別^ノ當^ノ明^ノ光^ノ院^ノ縁^ノ起^ル小^ノ養^ノ老^ノ三^ノ年^ノ開^ノ基^ノ地^ノ大^ノ日^ノ如^ノ来^ノ行^ノ基^ノ
御^ノ作^ノ回^ノ祿^トして^シ佛^ノ像^ノも^シ空^ニり^テ給^ル長^ノ牛^ノ村^ノの^ノ大^ノ日^ノと^シ遷^ルと^シ給^ル
地^ノ小^ノ豆^ノ澤^ノの^ノ大^ノ日^ノ如^ノ来^ノ長^ノ牛^ノの^ノ春^ノ如^ノ来^ノ十^ノ狐^ノ大^ノ日^ノ如^ノ来^ノ同^ノ作^トと^シこれ^ト地^ノ
別^ノ所^ノの^ノ大^ノ日^ノの^ノ事^ノの^ノ世^ノも^シ又^シ十^ノ狐^ノ大^ノ日^ノ如^ノ来^ノと^シ小^ノ豆^ノ澤^ノの^ノ春^ノ如^ノ来^ノみ^レが^シ
み^レこ^トは^シあ^リて^シ似^テも^シあ^リて^シ人^ノを^シあ^リて^シあ^リの^ノ別^ノ處^ノ近^ク山^ノの^ノ
宇^ノ加^ノ舎^ト捨^ノ神^トと^シり^テあ^リて^シ南^ノ部^ノの^ノ淨^ノ法^ノ寺^ノの^ノ觀^ノ世^ノ音^トと^シ地^ノあり^テ
出^ル給^ル南^ノ部^ノ淨^ノ法^ノ村^ノの^ノ人^ノを^シ説^クり^テひ^テ十^ノ西^ノ平^ノの^ノ丁^ノ女^ノ田^ノと^シて^シ云^フ
と^シせ^テり^テ馬^ノの^ノ口^ノ井^ノ健^ノ小^ノ事^トと^シこ^トり^テあ^リて^シ女^ノと^シて^シい^レば^シれ^バ
秋^ノ田^ノの^ノ別^ノ所^ノと^シり^テも^シこ^トり^テ住^ルわ^バあ^リて^シ女^ノと^シて^シい^レば^シれ^バ
夜^ノの^ノ本^ノの^ノう^ノほ^ノり^ノ女^ノと^シて^シい^レば^シれ^バ其^ノ後^ノ女^ノ事^トと^シて^シい^レば^シれ^バ
我^ノを^シ觀^ル音^トかり^テ女^ノと^シて^シい^レば^シれ^バと^シて^シい^レば^シれ^バ梓^ノ女^ノの^ノ事^ト
又^シ垢^ノ離^ノ淨^ノと^シて^シ地^ノあり^テ觀^ル音^トま^ニぬ^ル時^ノと^シて^シい^レば^シれ^バ

せうり二

高橋氏の祖表、太師兵衛より岩城茂成の後裔と世々を以て
世々高橋侍藏と云々とありしは、世々を遊去給ふりしに、

三哲山

神足在中野村、世々より分戸嶋といふ羽黒社、祭日六月
十五日七月十七日、三冠、踊あり、別當、大龍寺、開山、行基大
僧正中興、祖、慈覺圓仁大師、と云々、天合寺、世々、羽黒山侍
王寺、と云々の、あつた絶えざる、信濃國、川中嶋の軍、と云々、中河
和秀慶と云々、武士出家して秀慶法印といふ慶長元和ころより、
修驗者の始りたる、秀慶、寛永八年三月二十日、寂せり、九世、也、
十世、永全法印、明和四年、小天龍寺、と云々、往復の街道の東の、
琵琶沼ともむり大沼のありしは、琵琶法師が琵琶流しする
まじり沼の形、琵琶池、小幡、と云々、大旗のありしは、

三哲山さくら

三徹山、秋田郡南比内、在所郷の折橋の近き在り、つとありて
世人、大薩、温泉、と云々、いふ、法號と大輿言了心居士、寛文
壬子二月十七日、死す、行年、九本名、千葉上總介藤原、常政、南部九郎
浪人、と云々、われん、仕、ひ、と云々、醫術、百斛、武術、百斛、平跡とて
百石を給ふ、むと、自、名、と、三、哲、と、云々、南部、鹿角、毛馬内、住、世、家、
桐家、舊、宅、跡、あり、土、所、以、石、井、惣、重、即、家、常、政、の、書、難、辨、
疑、義、あり、野、田、定、之、即、之、家、藏、又、醫、術、書、あり、完、戸、又、在、此、門、家、藏、
三、社、託、三、卷、谷、田、部、駒、之、命、家、藏、と、云々、石、井、藏、人、細、忠、之、文、通、
あり、経、忠、の、櫛、々、石、井、氏、家、藏、と、云々、千葉、常、政、の、名、西、遊、と、山、の、山、
埋、三、哲、社、と、齋、と、云々、願、ひ、あ、り、の、西、遊、と、禪、と、云々、を、云、
は、三、哲、山、さ、くら、雪、路、は、ほ、と、云々、禪、と、云々、は、と、云々、と、云、

三哲山

世三衛山張の川はほく橋多たれと云ふんところの事なり

妙法蓮華の事

北比内大館鍛冶町に在り妙法山蓮花寺の創縁極名木のほし
少寺小阿波國妙教寺の僧潛龍院日廣上人現住三餘録の
編輯ありて月前落花と云ふ事ありて
すこらるひんも花のちと云ふ事ありて

山吹さくら

あれは山吹山振といふ日記あり秋田郡神足社にあり此處を
神足といふ事ありて山吹さくらといふ事ありて徳天白土實録亦
衛元孝戊辰以山城國神足神烈於官社と云ふ事ありて
よあれ文字お似たり科野の國と云ふ事ありて神足と云ふ
世神足の乱橋堀内高田屋濱小泉福田重信今日浦山下刈倉崎

長田片田と云ふ村の郷三月廿四日附り二流と云ふ事ありて
是と格葦の長中といふ貫と云ふ事ありて金槌堂と折ら申の折は不
母屋といふ事ありて木立屋則もて家ありて五月の萱蒲と云
如しといふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありて
いふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありて
菅大臣社ありてその由縁の事ありて三月の廿四日山振の花と云
小物と云ふ事ありて神を祭ると云ふ事ありて二月廿五日と云ふ事
秋田路と云ふ事ありて祭と云ふ事ありていふ事ありていふ事ありて
いふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありて
傳天正十七年の春三月某日内大臣織田信雄云出作國山本郡天瀬
河小配流ありて同十八年御謝免小配流り給と云ふ事ありて此君さひま
臣濱田車人地と云ふ事ありて出戸の天神宮と云ふ事ありていふ事ありて

さくら

後淵社司とあり今堀内村に在り世昔よりやゆりよかき近き其の
 原亦在り天神事後亦あり人をもれり新下より山吹を有り
 うちをり新下高きうたけりなる極もやを嘆へう又えりふ
 明く又もよもかれ山吹の色を傳ふ新のいとも
 吹く世元新の山吹を枝うすれ山吹とていとも名をあり

此元会社の膳原郡衣川の岸に在り驗断櫻山阿部貞任が
 蕨の蹟ことなり衣開申木とあり在り下野國河内郡衣
 衣川又入也江國衣衣川江源武鑑二卷小天文六町年九月廿
 志賀郡衣川山天神節諸河もさるとなりそをいかに
 つと多し冬河を賀茂郡舉母あり西り上の勢とてわらわ
 衣川より母を中もいかに地をいかに

駒形櫻

陸奥國般名井郡小秋在り山要中郷栗原郡此西郡世ありい
 なる吾勝郡より中津と詔りてあり山野の中里とあり栗原郡
 比七社の其一社也駒形樹神社と唱へて日宮とあり
 大日靈女尊と齋ひおに國扶之尊又其勝尊左天常立尊の
 置瀬尊也右齋之尊火尊とあり駒形峯大名神の事
 たり此山といふ高しとてつり群をいかにありて雪
 といふ巽方陸奥國栗原郡般名井郡向方を出野國雄勝郡
 水無月近く雪ありて浦に其形馬も似たりあまのいかに
 人唐の教なりあまの此栗駒山の村此木の物をいかに
 も物といふ此山とあり山吹をありていかに
 雄勝郡駒形山平の近きありて駒形の麓を今地なり

駒形日記より取れ此事を記せり。取れ書し波馬和の若葉堂より
記す。平泉あり駒形山法範寺に蹟尼寺の跡あり。平泉野寺に
奥山に今も平泉を秀衡の寺と云ふ。うづりて。尼寺の事なり。
西行物語権藤左近将軍に平泉の事あり。その事村本寺村本寺村の奥山
にあり。此處に。その名の多し。此を駒形櫻と云ふ。

櫻田ふく

北極を秋田郡神足神足在高田村に在り。まじりて櫻田あり。ま
じりて稲田と云ふ。其の各々今も櫻田と櫻田と。櫻田の
大江戸をとり。めとらぬ。まじりて名に

小和清水橋

右の神足と仰小大籠と云ふ。今大籠森と延寶園と云
の頃より任ぬ。稲荷社あり。去山に庚申祠あり。小和清水と

至陸奥國津輕浪岡中村。本目の森出甘藤の山和杉小和泉
あり。まじりて敷カを小和清水あり。まじりて電氣泉と云ふ。櫻田本
館と云ふ。まじりて。小和清水。小和清水。強は清水と
此事。記のまじりて。此也。

錦木の里さく

みらぬの津輕小浜比良奈伊小錦木柳。今あり。その
ゆゑに南部の鹿角鹿角。小錦木毛布。細布の由來。毛布。細布の由來。毛布。
まじりて。記の法あり。鹿角をとり。上津のまじりて。古
地。皮板三倉。草木村あり。まじりて。今も
錦木の里と云ふ。山根。小錦木。錦木。今も
機織音のむ。細布三百。錦木。今も
皇都三十一。記のまじりて。三百一。今も。今も。

吹上の里櫻

信濃國茅井郷善光寺外吹上といふ所ありそこ不重櫻あり其
多きを阿比と云ふことあり吹上といふ名と多増集法師の延喜記の
吹上の嶺不浄も夜つらと云ふ所あり又云ふ所のあり天の
赤き上の名ふは夜つらと云ふ所のあり阿比寺あり
昔高僧の 秋風の吹上ありと云ふ所のあり花あり山のあり
阿比寺多し阿比寺の法田吹上と云ふ所のあり是も阿比寺の
吹上といふ所のあり吹上といふ所のあり吹上といふ所のあり

龍神櫻

龍神といふ所近くは龍神といふ所なり此龍神は土崎の山あり其
その神櫻も云ふ湊福寺鎮守者秋田湊船筒澤若龍池龍
神宮也亦其左右在帶山將軍義定箇嶋治坂等舊跡傳謂

往昔聖德太子此地御下向之時芝野渡越初秋田湊御着
津呂給御船九人恐不乘山間埋之因其所號船筒澤則在若
龍池之上其後夷賊蜂起時為謀討將軍田村麻呂御下向
此時強敵退治御誓願祈神社其幣帛其所則號幣田山
軍議評定所則名議定箇嶋西南有流水將軍誅夷賊洗
血則名太刀洗河強敵退治處則名治坂飯津時濯惟幕所則
名幕濯川也云々又云々其所名湊福寺の鎮守の御神龍神
と云ふ若龍權現といふ所なり此神は舊跡あり其所
名に龍神櫻といふ所なり此江山水倉龍寺神洞古
此寺湊福寺履長岳宗安大禪定阿比寺木堂あり此寺名安倍
貞任後胤史記あり湊福殿阿倍守季守季子阿比太郎康季
少以次郎也康季子阿比康季子阿比長田高季子東夷の事

阿比次郎也康季子阿比康季子阿比長田高季子東夷の事

高雲山淨養院 尊道法師を住らる。日揚神社の枝神なり
大山祇神 藥師如来 馬頭觀世音 各ともありその古
跡 山石予山すい 稻前原山 山櫻あれ 日下ゆきさつといふ
その社々あり 四方石極ともあり ちのれむりといふ
石小々智く頼ま 幣とれいるも多し 其の元也といふ日下
の所をそよまき

連理のまつ

同郡能代の淡富町の山王宮額 近衛某卿 真筆に此社の町はま
むむ 櫻多けれ ところ 橋小路といひ 今も 橋た なく 櫻の多
樹の木連理あれ 連理小路といふあり 其を ともいふ 一石を
捨るといふの石と あり さいさうといふ 評代神代といふ
廿六様も多し 今も なるなる 白町の 珣龍寺の 櫻の 三石 古木

〇防州公内

見取前さう

南部盛岡見前村のころと津志田といふ 此津志田といふ
大浦右言大夫為信云 津輕組津輕の 舊宅跡あり ところ
津輕村といふ ところ 村近き なる あり

らむきれい

同南部の石文村と 藤村との 間の中 千屯明神社あり
古蹟小 みるれいあり 石と 日と あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
徳訓琴も 和名抄小 千人所引 磐石とも あり 神代紀も あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
神手末小 千引石と 捧来と あり あり あり あり あり
逸不あり 俊頼 君の あり あり あり あり あり あり あり

誰、あつべき、喜撰式、大石の墓と見えあり、万葉集、五卷、平引の石とせしむ、頭手つけしとあり、古事記、平引の石と見え、五卷、おきの石と見えあり、山城守治日碑の外山あり、即ち方丈石とあり、鴨長明、住居所、道遠院、輕き舟、車をよみ、至りて、平引の石と名を呼ばし、とを、其居方一丈の室、高七尺、過を柱楹皆鎖を用ひ、何れ移を時、二車、小載、舟とせしむとあり、舟と見え、此地、平引社あり、杜、栗木と多く、一とあり、秋、此杜の、茂、栗、三千石、目拾ひあり、松前、平海、事あり、又、櫻も、と多き、杜、

小田原櫻

相模、國、小田原、北條氏康の城、元龜の櫻を、いづくもなき、(重後、あまのつり、ひさし、本朝三國志云、小田原北條氏康、逝去、元龜元年十月三日、春秋五十六歳、大聖院殿、東陽岱公居士墳、

墓、小田原に在り、早中、寺者の上、多数、初、建、及、と、下、總、國、古河、城、下、小、寺、建、立、て、大、聖、院、と、号、を、和、歌、西、三、條、道、遠、院、殿、の、門、前、に、其、頃、關、東、無、双、の、連、者、と、去、一、と、也、夏、の、日、も、西、山、に、没、後、氏、康、納、涼、の、あ、ま、高、樓、小、登、り、て、遊、射、し、け、る、を、狐、の、頻、日、鳴、き、を、梅、宮、軒、出、し、し、右、大、將、家、建、久、四、年、夏、信、州、淺、間、三、原、に、狩、し、給、ひ、と、も、狐、の、嗥、と、怪、し、し、あ、ひ、愛、甲、奉、子、隆、頼、佐、と、美、り、ま、つ、る、あ、ま、の、と、り、れ、詠、も、う、ま、と、や、け、し、い、氏、康、史、に、あ、り、と、も、夏、狐、の、事、ふ、お、ち、や、め、と、も、夏、を、ま、り、移、り、鳴、く、野、の、か、く、衣、已、し、く、が、身、に、上、ら、ま、ま、し、詠、し、給、ひ、追、習、の、ま、あ、り、夜、明、て、又、れ、い、彼、狐、の、鳴、つ、る、あ、ま、に、倒、れ、死、て、あ、り、し、諸、人、皆、當、意、即、妙、の、不、思、議、感、に、け、れ、る、と、又、え、し、り、

ち、う、べ、の、さ、い、ん、

さ、い、ん、の、う、り、

同書云三州寺部城生鈴木日向守運心の園ありけり徳川家
今川義元と軍議ありし永祿元年二月廿日寺部の城にあり
寄せ給ふ中身十六歳是也初陣とつけあまひと云々と云ふ
此寺部の八幡宮のやと云ふ山後といふ多し

名(中)と云々

ありて云々遠江二侯城將依田右衛門佐幸光明城と武田
勝頼朝比奈又太郎と見えたり二侯も光朝山も光朝桑山の
街道二侯も後身も光朝山の七品樹のありて坐合をそのは
山と云ふ云々と云ふあり

小袴と云々

此相國雄勝郡と赤袴といふ村あり云々云々大袴あり云々小袴といふ
廟あり小袴といふ名をいふ云々地何と云々特自鬼禪と小袴といふ

母と云々中袴と云々禪といふ所の無相小袴といふ云々世澤村と出川
と云々のありてこの戦れ諺小袴と云々軍丸出川といふ世村あり
瀬原村桔梗山と云々山極あり杖と云々云々多し地何と云々大川といふ川あり
名水四年七月末の夏四月某日洪水岸崩れて土の中より家三戸出たり
其家の内小長二間半の杉の船掉出たりむと云々此川廣く舟をい
はせり妙也といふ麻田村佐井川世あり流れももり天長五年
におりたのれり事後紀に云々其ころたのれり云々埋れ云々
安永四年のありて家の内小板も墨画の佛并作の机あり銅板
敷此と云々下と云々文と云々聞たり云々祝禱一ツありて云々
らるひ禿といふ云々木履ありて世木履右不踏む左の云々白鬼緒の穴
寄りて有り左と云々右の云々小はるや此穴と云々粟柳と云々小藤の葉
散り難と云々出たり云々木と云々云々榎と云々木と云々糸杉と云々杉と云々

さうり

九

寛政五年のころより四々々向しく申欠川の岸崩れ板津村の
 市重即ち家代畑を家の五つをり出さ事ありまこと文化
 五年の夏脇神村の枝郷小勝田村の高岸米代川の争うら崩れ
 大なる家出あり機具絡架、薙薙、若公計、穂など出さる中に八角の
 木の長二尺一寸六分ほどに又千六十字出て二字の間は穴あり機
 串の心とまゝの出さ事考て一卷とせり

うまきあやう

三つに磐井郡東山在唐衣村に清悦坊が塚あり清悦坊は
 十四郎清悦と判官義経未十歳ころより仕まつりて後日化術
 演りたり清悦物語とありそが中、國守政宗は清悦を
 つし給ふ事ありと長壽の人、此清悦の塚の近きまめであき
 花あきふられ世をり名とらしきぬ梅とせり

二十九日櫻

出羽國秋田郡南比内在獨鈷古名枝郷白詰古名と
 ありありそ花坂と申す、蝦夷も家梅一地ありと
 草薙と申す堀り出さ事ありそ、あまの斯良奴伽より堀り
 掘りとい齋山伝す、あむりまを梅ありありと今も
 あり花坂の名ありとせり

徳一とて

津輕の子縣山、梅ありこの日より小春わらひとて徳一大
 師の事かといとせりおぼしき、葉のまふくといと記しおぼし
 るはせり子掛とい名、少々の山中郡も小掛といとせり
 同名あり古掛、小懸、兒掛子懸などいふありとて徳一大師の
 扶桑隱逸傳云、徳一者唯識之翹林尾也、聞古常之葉波

さうり

廿一

寺而居門葉尤茂而疾沙門莊後弊衣麁食恬如自怡
 難行長途不用乘輿駕疲牛騎疲馬嘗作新疏破山家
 大師相徒括之云世尊女以清女名曰之柳しゆをそこ
 と予懸といひ其子名徳一大師也子柳女津輕く秘傳しつ
 世に貞女推而跡をいひあゆむるまろりき事云

三笠の山さうす

あけつるま 聖武帝太皇山の八重櫻を折りて光明皇后へ
 贈り給ふ事記 詞 春季 出 美花 坏現 玉女
 多し 戀歌 日をもてをてをいふ山後妹よ是れはや夜に
 ちとるえんしとまに事くくといひて羅あせとてもの
 おくつわさうす

奥の宮を雁藤郡に在りおむのふといひてあしき嵐山に此峯

杜鹿ふあはやくつれいといふ多けれは世名をわらうとていふこと
 おくもの事と春日日記といふはあやうらうといふこと

燈其空樓

秋田の妻走の寶塔寺の燈其空樓の事といふこと記はよき
 向ふされいふことおのせむむろ一権三とがの此をいふしと
 やおあつても心ありやと驚くこと 薦着てもおあしむの極うな
 多うこといふことあらあきれていふれよりおん徳政夜話云
 寶塔寺の燈其空樓といふこと 明和の頃玄庵倍良中を俳諧師
 ある美濃守が宗匠にめあつれといふ専ら事云とて一之其空楼と
 あつての此樓の盛りの貴賤老若遊後貴美なる事ありしこと
 其本小芭蕉の碑と建人門人お談して建つ其句四五對の揃
 ぬ花見えうらるといふ事多し其後此樓一枚折れり慎ん

事は物の前表にまはりて、佐良、俳道の情に、あつたもの、
 世櫻の本の巡り、五尺を何とむ、高き大斗は、五尺上を、四寸枝
 多れて、蜘蛛の如し、依て名とせ、横に、廣く、敷七、八間、有べし、
 高低、こと、四寸、出、あつ、奇特の、木、あり、かく、四寸、と、つ、皆、負、も、樹、の、
 小、枝、の、匂、い、も、と、く、麝、の、匂、い、も、と、く、あ、つ、た、小、四、寸、揃、り、ぬ、と、い、ふ、と、
 多、く、相、應、せ、ぬ、と、い、ふ、べ、し、それ、より、次第、に、枯、れ、物、の、け、し、世、人、
 佐、良、と、そ、う、も、事、を、し、て、船、人、句、と、い、ふ、も、其、場、を、足、合、て、
 之、の、心、宗、匠、の、り、と、ま、ひ、い、何、と、言、て、自、己、の、庸、人、と、い、ふ、と、
 卒、嶺、の、松、枯、れ、ぬ、と、い、ふ、と、き、道、遠、後、の、中、野、の、て、つ、び、替、あ、え、し、と、い、ふ、
 佐、良、の、あ、つ、た、松、の、枯、れ、ぬ、と、い、ふ、と、き、何、事、も、時、あ、つ、た、事、也、徳、政、
 翁、の、死、と、い、ふ、と、き、世、の、事、の、あ、つ、た、け、り、と、い、ふ、と、
 こゝろ、の、い、は、し、

津輕の幸崎、筒濱、近、く、轉、り、川、と、い、ふ、細、流、あり、この、山、岨、さ、さ、り、
 なる、松、の、二、三、本、生、れ、し、り、と、い、ふ、と、き、此、の、名、と、せ、り、此、川、の、
 秋、の、石、の、多、し、と、い、ふ、と、き、河、原、と、い、ふ、と、き、と、い、ふ、と、山、回、り、石、の、海、
 と、い、ふ、と、き、石、斑、魚、の、鳴、き、と、い、ふ、と、き、古、松、あり、此、こゝろ、
 北、川、の、流、る、と、い、ふ、と、き、

和田寺櫻

和田郡南比内、在、り、子、村、の、中、に、天台宗、の、十、孤、山、和、田、寺、と、
 い、ふ、寺、あり、大、永、三、年、癸、未、春、獨、鈞、古、名、子、後、相、和、郷、の、城、と、
 築、き、其、城、主、淺、利、與、市、義、遠、苗、裔、と、い、ふ、と、文、龜、の、始、と、い、ふ、と、永、正、十、
 四、年、丁、丑、の、時、に、陸、奥、國、鹿、南、郡、松、館、と、い、ふ、所、に、在、り、北、比、内、と、
 領、せ、り、其、城、造、營、の、と、い、ふ、と、和、田、寺、と、雪、波、の、内、の、布、刀、澤、風、山、の、奥、
 十、孤、山、と、い、ふ、と、鳳、凰、山、の、麓、と、い、ふ、と、鳳、凰、山、平、林、寺、と、い、ふ、と、寺、の、号、と、
 鬼、の、山、と、い、ふ、と、

改りて天之九年癸巳の年曹林とあり相京補陀寺は九世草菴守
瑞禪師と自鼻祖として曹洞の家式と傳、回祿して寺の寶物古記
等伊はる中、北寺令、大館小遷寺、後利家の菩提寺あり、
玉林寺殿明庵瑞光居士後利則賴天文十九年後利賴平後利則賴
津輕城主為信と云いて和州とあるとあり、慶長元年
山田村小渡ひ同三年小倉の家臣佐藤大學心りりて沼館の道老
賴平と伐り、賴平は号、昇平院殿在舊宗清大居士慶長三年戊
貞澄考、淺利家の根津神平、流と云いて、舊鳥養小名與、人多く
此賴平も舊といふ所、好むげ、云々、年舊鳥の文字と法名とせり、
年舊鳥、舊鳥の事と云い、曾波の鳥、天鼓、小鞠谷三平りや
三人中して春、今、やうると云い、山川の淵あり、その所々と風風と云い、此山の麓
和州の舊跡あり、其を稱せり、後、その所と云い、和州の舊跡と名する

あじろたね

屯の園を、みおれく、在り、其舊地、後、まじろたね、なるやうと、
名附り、後、割茶に、屯の園、奥州栗原郡あり、坂上田村麻呂、磐妻
と征せし時、小屯と云い、その後、源賴義の清原武則、會せし所と
云い、と又云う、今、其跡あり、

河邊

出羽の河邊郡、小中へ大なる樓ありし、と云い、辨と稱し、と云い、
河邊、を人の姓とあり、垣根草四巻、小樓と云う、又、大和國高市郡、
小野、舟橋と云あり、其、靈夢、と云い、りて、小樓と名付て、と云い、
その、島と云い、中へ、一旗の、う、河邊、三郎、若、賀、重、部、り、其、跡の
と、云い、と、云い、む、と、云い、と、云い、と、云い、と、云い、と、云い、と、云い、と、云い、と、云い、
古の地、續紀廿二卷、寶龜、四年、八月、己卯、出羽國、鎮、秋、將軍、安倍

こゝろ、や、り、二

廿四丁

朝臣家麻呂等言狀志良後倭囚宇奈古致曰云由理柵者
賊之要害兼秘田之道云寶龜之初國司言秘田難保河邊
易治者當降之議依治河邊云と云云

長岡の一重櫻

出羽の南比内郡田郷長岡城至波利勝頼室と云初ハ大館より
とて出ると片山駿河府田正覺寺門前小寺とひそに勝頼の
末の如く長岡の鎗を以て突つて勝頼一鎗を突れ馬より下
降りて其處あつてつとあき古井の内を船入りてありぬその初めは
玉林寺小巖の現成院殿機軸全大居士天正九年辛巳清心院
月廬妙光大師勝頼室片山駿河末今片山村といふ後町と
云ふ事あり片山半太郎といふ古城跡長岡遠く一重と云ふ者
人のいふ所を名せり玉林寺を輪田と云ふ寺といひ天台のころを

十二所の長興寺と云ふ下野國宇津宮の常光寺の枝寺あり
うと云ふ玉林寺銭利家の遺物と黄金製の横刀とつと云ふ鎗とと
寄せられ尚縁といふ灰となりぬ其灰の中ら半月の眉尖刀の柄の出ほ
りあり寺に淺利の古記録等もありしうとて傳へると云ふ傳

太良八重櫻

平城天皇の代大銅弘仁のころ八重櫻といふ多くあつたと云ふ
花小蓮の其母春を思ひてつと云ふ人の傳へ一本も幾くは花
の種を傳へむと云ふ人もあり沙石集六卷昔心有人事といふ條に
太良の都ハ八重櫻と云ふれ當時も東圓堂の前小在り當初時の
后上東門院興福寺の別當小仰て彼櫻を召つけ掘て車かま
かきせけて大衆の中見合て事の子細を問ひ思つて答へければ
得る櫻を無左右のせし別當返さ不當也僻事且其色を

此の後の仰れは、是程の名木と云う進をきかぬよしとて、
 目吹大衆催して打も別當も拂くべしと云、此事小も七
 如何も重科行れば、我身張本不可出と云ひける。此事女院史も
 奈良法師の心あり者と思はれ、わらふき大衆の是の色深りて
 さう、此櫻と我櫻と名つけしとて、伊賀國小余野と云庄を寄せる
 花の庄と名つけし櫻とせざるは、花の盛七日宿直とて是守り
 せしに、今に彼庄寺領あり昔と云ひて、事有けりと云、元
 平の此事と和漢三才圖會七十卷伊賀花牆庄、本名餘野庄
 一條帝之后名彰子跡上東門院、養保元年九月薨、十
 性慈順有貞女之風、嘗聞南都東圓堂前之八重櫻之美
 命興福寺別當欲移我極庭、別當應命於是、僧徒等
 大怒曰、此櫻者吾寺之靈木也、何出于他、和論不果后聞之

謝曰、惟毒之過也、蓋奈良法師徒來我、疑為殺風景人也、
 今和好風流之桑門也、其愛也渥、自今以後呼斯櫻而可
 稱我櫻、後世全勿移我于他、勿則且寄附伊賀國餘野庄
 每年花時、回牆圍花守之、因以餘野庄號花牆庄、衆徒等
 及都下悉感之、其後以彼櫻被移我于平安城、今此
 都の八重櫻多九重、今此伊勢大輔云、見之、傳訓、
 前編二十四、今此上東門院、奈良の都の八重櫻と我櫻と名
 つけしとて、伊賀國小余野と云庄を寄せる花垣庄と名け、此木、
 せざるは、花の盛七日、宿直とて、是守りせしと云、今
 彼庄寺領ありと、砂石集に及ぶ、新續古今集、永仁大嘗會、悠
 紀、方屏風、花垣里、白妙の木綿より、今此神まつり、今此伊賀郡あり、
 花垣のまじり、今此兼好集、今此菩提樹、今此藤も、今此北余野村あり、今此伊賀郡あり、

きとをえり今のせうけくあゝの都八重櫻物語にけりまを

いよまら

伊勢國白子里の觀音寺の西木子櫻の事といせまりの人の
つふる能く能くあやうめはじ花にまゝ伊豫國の温泉
の事いふる人のまじりういふのゆひのあまかむるまじり
六花集の初いよの湯樹敷を左八右を九中十六まじり
いよの湯此ゆひのまじりつるまじりあまかむるまじり
まじり此國ふ十六日櫻を初春の十六日まじりまじり
事まじりあまかむる和漢三才圖會云伊豫國久米郡のまじり石出寺
同郡石出村に在る後山東南に本尊坐像三尺三寸有河野
四郎城跡道後湯左行出松山城
右行出山越村山越村有櫻名正月十六日櫻每
年以此日為盛と云えりまじり御列女 初春のまじり
わげまじり都の櫻まじりまじり

まじりまじり

廿七

破損あり

